

大阪市立大学先端的都市研究拠点「共同利用事業・共同研究公募」2018年度採択課題
Results of the Platform for Leading-Edge Urban Studies' "Joint Usage / Research Public Offering"

都市研究プラザでは、2014年度より文部科学大臣の認定を受ける共同利用・共同研究拠点「先端的都市研究拠点」として、他の研究機関の研究者やNGO/NPO等の現場ワーカーなどとともに共同研究を推進してきた。2018年度は9件の申請があり、5件を採択した。研究テーマならびに内容は、以下のとおりである（順不同）。

1) 「地方都市における子どもの貧困に関する研究—『社会的排除率』の理論化—」

本研究の目的は以下の2つである。

- ①かつて、ピーター・タウンゼントが相対的剥奪から定義づけられる貧困の概念を提示し、当該概念に基づく貧困の計量化を試みたが、それと同様に、社会的排除から定義づけられる貧困がどのように計量され得るのかを理論化すること。いわば社会的排除からみる貧困に関する理論的整理である。
- ②子どもの貧困を、相対的貧困のみならず社会的排除という概念からみるときに、それがどの程度の深刻さをもって、地方都市の子どものたちのあいだに広がっているのかを明らかにすること。

以上である。

(志賀信夫：長崎短期大学保育学科専任講師)

2) 「地域共同のまちづくりによる社会的不利地域の再生に向けたアクションリサーチ」

AKY研究所では、浅香・加島・矢田地区における子ども支援ネットワーク構築に向けた試みとして、昨年度全3回にわたる「子どもの貧困対策連続セミナー」を開催した。今年度はより実践的かつテーマを絞った活動を計画している。まず、テーマについては、近年3地区周辺で外国にルーツをもつ子どもが増加している現状を踏まえ、「外国にルーツをもつ子どもの支援」に焦点を当てる。また、昨年実施した講義形式のセミナーに加え、先進事例の視察を含めたオンサイト研究会を開催し、より実践的かつ参加型の企画とすることで、教育関係者、研究者、行政職員、地域住民等の立場の異なる参加者どうしが自由に議論し、垣根を越えてつながることを目指す。

(矢野淳士：AKY インクルーシブコミュニティ研究所研究員)

3) 「空き家の改修と利活用によるレジリエントなコミュニティづくりの形成に関する研究」

大規模な自然災害が頻発し今後の防災計画のあり方が問われるなかで、災害を最小限に留め安定的な生活を取り戻すというレジリエンスの視点から今後の住まい・地域のあり方を検討することが喫緊の課題になっている。本研究は、従来は負の遺産とされる空き家を、被災後の生活と安定を持続する地域資産として位置付け、空き家の改修と利活用によるレジリエントな住まい・地域づくりの可能性について検討する。またこれを念頭に、研究担当者らの建築・都市計画、防災や地理学の学際的な視点から、レジリエンスの意味や意義について議論を深める。

(西野雄一郎：福岡大学工学部助教)

4) 「東アジアインクルーシブ都市ネットワークの構築に向けた研究」

東アジアの諸都市では、経済発展の一方で格差拡大が指摘されており、競争と分断ではなく包摂型の都市(Inclusive City)の実現が求められている。そのため多方面にわたる研究者や実践家、行政担当者が一堂に会して相互に知識や資源を共有し、東アジア都市間のネットワーク形成に資する諸事業を行う。本研究では、連続セミナーの開催による都市問題の同定と相互認識の共有、解決方法の模索を行うとともに、第8回東アジア包摂都市ネットワークに参加し、都市間の経験交流を進め、合わせてニュースレター等による研究成果の発信を行う。

(古下政義：東アジアインクルーシブ都市ネットワーク・ジャパン事務局長)

5) 「東アジア先進大都市における「サービスハブ」の空間的形成過程—ローカルな住宅市場を中心に—」

本研究は「サービスハブ」という資本主義経済下で包摂の対象となり難いいわゆる「剰余人口 surplus population」の生活を支えている空間についての研究である。既往研究と違い、本研究は住宅市場に関わる自助的ネットワークのダイナミクス、つまり公的セクターの残余ではない支援機能を明らかにすることを目的としている。ケインズ主義的な「公的都市」という構造的背景を有さない東アジア先進都市におけるストリート経済を分析対象に

することで、現在の格差社会の中でこの空間の発展可能性を、理論・実践の両面で考察する。

(キナー・ヨハネス：URP 特任助教)

At the Urban Research Plaza the Joint Usage / Research Platform “Platform for Leading-Edge Urban Studies”, accredited by the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology, is since 2014 promoting collaborative research, that involves researchers from other research facilities or members of NGO/NPOs. In 2018 out of nine submitted research applications five were accepted.

第 10 回創造音楽祭

The 10th Creative Music Festival for Children

2018 年 5 月 6 日にインドネシア芸術大学ジョグジャカルタ校大学院キャンパスで開催された創造音楽祭は第 10 回を迎えた。小学生が、新たにつくった音楽作品を持ち寄り、パフォーマンスのインパクトを競うものである。価値判断の困難な新たな創作についてコンクール形式で行うことには是非があるのだが、取り組む小学生のモチベーションが格段にあるため、このような実施方法となっている。芸術大学の学生が 2 人 1 組となって、音楽祭の 3 ヶ月前から小学校に通って作品作りのサポートをしている（大学の授業の一環）。今年度はジョグジャカルタ市内から 23 校が参加し、それぞれ 5～10 分の新作を披露した。本プラザとインドネシア芸術大学との間の交流協定に基づく事業である。

演奏される作品のほとんどは既成の楽器を用いない。ペットボトル、空きカン、コップ、手製の笛、紙袋、箒、竹筒など、日常の身近な物で演奏する。ピアノなどの備品が整っていない小学校で、音楽教育に困っているという現場の声への応答でもあるが、直接的なきっかけは、2006 年 5 月に起こったジャワ島中部大震災である。

この地震は 6000 名強が亡くなるという大災害となった。小学校の被害も大きく、しばらく授業もままならない状況であった。そんなとき、いち早く子どもたちを集めて、音楽のワークショップを始めたのが芸術大学の教員たちであった。目の前で多くの人が犠牲になるのを目撃した子どもたちの心理的衝撃を少しでも和らげるために、「何か」に集中する方法を模索した教員たちが、音楽や美術のワークショップを展開したのである。子どもたちは鍋やペットボトル、さらには瓦礫などを持ち寄って、教員の指導のもと即興的なパフォーマンスを楽しんだ。

復興支援に取り組んでいた本プラザの中川特任教授は、芸術大学の教員と話し合い、この取り組みを継続的に行うことを提案し、2009 年に改めて「子どものための創造音楽祭」という名のもとに始めた。音楽は「楽器」がなくてもできる。むしろ、皆で協働して新しい音楽を作ることを経験することにより、困難な課題に対して柔軟に解決してゆく、大げに言えば「サバイバルの力」をもつことができるようになるのではないか。音楽家をつくるのではなく、生き抜く力を

つけるための音楽教育の可能性がここから拓けてくのではないかとことを期待したのである。なお、この音楽祭は 2011 年の東日本大震災の後、日本にも導入され「熱帯音楽祭」という名で、大阪、神戸などの小学校で取り組まれている。

■中川真（URP 特任教授）



The 10th Creative Music Festival for Children, which is a project based on an exchange agreement between the Urban Research Plaza and the Indonesian Institute of the Arts, was held on 6th May 2018 at the Yogyakarta Graduate School Campus. At this event, elementary school students presented new music they had created themselves, and students from 23 different schools in Yogyakarta participated. While it is a music festival that has its roots in the reconstruction efforts of the 2006 Yogyakarta Earthquake, it was also introduced to Japan after the 2011 Great East Japan Earthquake, and is conducted in cities like Osaka and Kobe.

東アジアインクルーシブ都市ネットワーク ジャパン (EA-ICN Japan) の創設 Founding of the East Asia Inclusive Cities Network Japan (EA-ICN Japan)

経済のグローバル化により国家間・企業間の競争が激化しており、東アジアにおいては、急速な経済成長の一方で、人びとの経済的格差は拡大傾向にある。合わせて深刻な少子高齢化が進むことが予想されており、都市部においては、人口減少に伴う「都市のスポンジ化」や「都市縮小」とも言われる都市問題が顕在化しつつある。

一方で、母子世帯や子どもの貧困、若者の生活支援、増え続ける外国にルーツを持つ人々の定住支援への課題など、都市の脆弱化にまつわる実態は、ハード面に限らず、人間生活のソフト面にまで深く及んでいるのが現状である。

こうした東アジアの諸都市に共通する新たな経済的社会的都市問題に対しては、より人間らしい暮らしを営める居住空間や、生き生きと活力にあふれた生活空間、そして安心できる居場所の確保が重要であり、全ての人々を包み入れ、全ての人に生の機会を保証し、人権の保障や社会への包括的な参加が可能となる都市社会の実現が求められている。そのためには、国内外の都市が競争体制へと突き進むのではなく、活動を通じて得られた知識について相互に情報を共有し、協力する体制を構築することが必要である。

こうした包摂都市の実現に向けて、様々なテーマに関わる研究者や実践者、行政担当者が一堂に会して始まった東アジアにおけるインクルーシブな都市間ネットワークの形成に向けた取組みが、本年度で第8回を迎えようとしている。これまでかかわった都市は、大阪市、堺市、八尾市、箕面市をはじめ、韓国のソウル市、城東区、京義道始興市、台湾の台北市、新北市、香港市など、多くの都市に広がっている。

そしてこのネットワークの日本におけるプラットフォームとして、今般「東アジアインクルーシブ都市ネットワークジャパン (EA-ICN Japan)」を立ち上げることとなった。今後はこうした枠組みをより強固なものとし、実践、研究を深めてまいりたいと考えている。

■古下政義 (東アジアインクルーシブ都市ネットワーク・ジャパン事務局長))

In times of increased competition due to ongoing globalization, in East-Asia urban problems, caused by the widening economic gap between people, declining birth rates and aging populations, are becoming increasingly apparent. These serious issues are not only limited to the physical urban infrastructure, but unfold also in the social spheres of human life. To find solutions, recently the “East-Asian Inclusive Cities Network Japan (EA-ICN Japan)” was founded as the Japanese platform of the East-Asian Inclusive Cities Network. Strengthening this framework further and improving praxis and research are important tasks ahead.

家と藝術の在り方を考える、三日間の展覧会 「藝術のすみか」 第五回・第六回を豊崎プラザにて開催 Exhibition of Housing and Art: 5th and 6th “Art Dwelling” at Toyosaki Plaza

都市研究プラザ豊崎プラザの主催、「絵と音と言葉のユニット：repair」の企画で、継続的に開催している「藝術のすみか」が、2月23～25日、4月13～15日の各3日間の日程で行われた。この展覧会は、参加作家が会場である



伝統的町家：豊崎屋を下見するなかで、場の特性や雰囲気を見極めて、会場内のどこに作品を展示するかを決めることから始まる。場所に合わせて制作したり、選ばれた作品がある。来場者は、作品のみならず、作家が何故そこに展示したか、何を読み取って展示したのかに思いを巡らせることになる。床飾りや床脇の違い棚、各所の額がかかるような実際の装飾空間に加えて、床脇の天袋の戸や蔵の扉、欄間など、実際のものと差し替えて仕込み、元々そこに有ったと見紛うほどに溶け込む作品、衝立のように和室の調度品に沿わせたものなど様々であった。作品の特性をいかに豊崎屋に結びつけたか、これらの話が二日目のギャラリートークでのぼる。これに先立ち開かれる repair の演奏会と合わせた時間には、50人程の来場者が集い、繋がる三間の和室の収容力が発揮された。靴を脱ぎ、住まいだからこそ味わえる空間が、出展作家との交流や来場者同士が語らうくつろぎの時間を生み出していた。

<参加作家>

第五回 黒田武志・ka-ji・渡部真由美・filithematerira・repair

第六回 黒田武志・木鳥 works・西野詩織・谷内亮太・repair

■綱本琴 (生活科学研究科研究補佐)

Hosted by Toyosaki Plaza the exhibition “Art Dwelling”, which is regularly organized by the “painting, sound and word unit: repair”, was conducted twice, from 23-25th February and 13-15th April.

都市創造性コラム 3

文化創造のフレームワークとメタセコイア

Okano (2017, CCS 7-1) では、アクターネットワーク理論 (ANT) を用いて、ヒトとモノ、知、場・道、集り・交流、記憶の5つのフェーズから都市の文化創造について分析してきた。

ANTの核心として、西洋における「自然」と「社会」、「主体」と「客体」という近代的二分法を採用せず、「人間」と「非人間」のイデオロギーの区別を超越しようとしていることにある。すなわち、アクター（行為者）は近代的な人間主体を示すアクター(acter)ではなく、独立して本質的な特質を持たず、単にエージェンシー（行為能力）であるアクタント(actant)とみなされる。これにより、ヒトとモノの結合からエージェンシー（行為能力）が生まれ、アクター間のネットワークに分散されていると考えられる。また、意図 (intentionality) を行為から分離することによって、「物のエージェンシー化」（行為主体性）を可能となすとする。「意図」というのは行為の基準でなくなる。ANTは、社会的事実としての「意図」は、行為の原因ではなく、逆に「意図」をネットワークが生じる行為の結果と捉える道を開くものである。

銀杏とともに「生きた化石」とされる「メタセコイア」は、大阪市大のシンボルであるとともに、昭和天皇をはじめとする皇室にとってもご成婚時に記念植樹される重要なものである。中国では「水杉」と称され、希少樹として伐採が禁じられている。また、上海や南京、杭州などにおいてアカデミックなシンボルとして大学の本部棟の中心に植えられてきた。これに対し、日本の場合は恐竜の時代（第三紀）に絶滅したこともあって、中国の生きたメタセコイアを上述のようにアメリカを経由し、大阪市立大学附属植物園を生産基地として西日本に広げられた。成長のスピードが速いため「すくすくと健やかに育てほしい」という願いから小・中学校の校庭に植えられたほか、古墳の発掘の終了後にその周辺を囲むように植えられ「太古の森」の象徴として位置づけられてきた。

「メタセコイア」は「持続的で包摂的な創造都市」の在り様を体現している。発見した人々とそれを学術的に検証し、世界的なネットワークでその存在を知らせるとともに、中国の内戦下にアメリカの市民団体である「レッドウッド保護団」の資金的援助を受けて採取した種を持ち帰り、終戦後、生育環境の類似した日本に苗木を大量に送るというチェイニー教授（カリフォルニア大学）の行動力と、生きたメタセコイアを神木として信仰の対象にしてきた四川省の農民家族（少数民族）と地域のネットワークなど、持続的で包摂的な社会の在り様を観察し、現状の社会と比較し、多様な知見を得ることができる。決して伐採すべきではない。

Okano, H. (2017) "Cultural editing for creativity: A framework to associate person/thing, event, road and memories," *City, Culture and Society*, 7-1, 55-61.

■岡野浩 (URP 教授/CCS マネジニグエディター)

In Okano (2017, CCS 7-1) the actor-network theory is applied, and urban creativity is analyzed through five phases, called "people and things", "knowledge", "places and ways", "gathering", and "memory". The Metasequoia, which is considered together with the Ginkgo as prehistoric survivor, is not only the symbol of Osaka City University, but beginning with the Showa Tenno it is also valued as a commemorative tree for weddings at the imperial court. In China it is called "shuishan", and its logging is prohibited because of its small number..

CCS スコア (2018年7月7日現在)

- CiteScore: 1.31
- Source Normalized Impact per Paper (SNIP): 0.789
- SCImago Journal Rank (SJR): 0.617

豊崎プラザ

「いきている長屋—大阪市大モデルの構築—」が 2018年 日本建築学会著作賞 受賞。



2006年に開設した都市研究プラザ豊崎プラザで、谷直樹・竹原義二の両先生を中心に住居史、住生活、居住政策、住居デザイン、住宅構造、住教育、居住福祉、まちづくりの研究者・設計者・学生が積み重ねてきた実践をまとめた一冊。

大阪に戦前長屋が何千と存在することに着目し、長屋生活の丹念な聞き取りと読み取りを基

盤に、構造や歴史性を尊重した長屋再生の記録であることや、内容の普遍性などが評価された。豊崎長屋での研究は10年を経て、その成果は他の長屋へと波及している。その意味でも、大阪長屋再生の先駆的立場を確立した大阪市大モデル、豊崎長屋を記すこの1冊を手にとっていただきたい。

「いきている長屋

—大阪市大モデルの構築—

谷直樹・竹原義二・佐藤由美・

綱本琴・小伊藤亜希子・

小池志保子・榊田洋子・三浦研・

藤田忍 著

大阪公立大学共同出版会 2013年3月出版

■綱本琴 (生活科学研究科研究補佐)



URP 
Osaka City University | Urban Research Plaza
大阪市立大学 | 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、都市再生へのチャレンジとして大阪市立大学が2006年4月に設立した全く新しいタイプの研究教育組織です。「プラザ」という名前が示すように、都市をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。先端的都市研究拠点として、現場や海外での研究・まちづくり活動、さらに、世界第一線級の研究者や政策家と国際的なネットワークを構築しています。

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138 tel.06-6605-2071

e-mail : office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

所長 阿部昌樹 副所長 全泓奎 林久善

ユニット長 1U 阿部昌樹 2U 嘉名光市 3U 水内俊雄 4U 岡野浩

大阪市立大学都市研究プラザ ニュースレター 第40号

編集長 (発行責任者) 阿部昌樹

副編集長 全泓奎 水内俊雄 岡野浩

編集主幹 鄭栄鎮 波床尚美

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp>